

第六章 準動詞(3)

分詞

レクチャー1

分詞についての基礎知識。

分詞とは、元々動詞だったものに、-ing や -ed をつけて、形容詞の働き[性質]も兼ね備えるようになった、つまり『「動詞」と「形容詞」の性質を”分かち”持つ”詞(ことば)”』という意味です。

-ing がついた分詞を「現在分詞」と呼び、-ed がついた分詞を「過去分詞」と呼びます。

※このほかに、動詞と接続詞の機能を兼ねる分詞構文という用法もある(詳しくは後述)。

レクチャー2

分詞の用法[働き]。

(1)分詞の動詞的な用法[働き]。

上の説明の通り、分詞には動詞的な性質[働き]があります。この分詞の動詞的な性質[働き]については、中学校のときに学んだはずですが、具体的には以下のようなものでしたね。

① 「be 動詞+現在分詞」という形で、進行形(～している最中だ)を作る

(ex) He is **playing** baseball at the park.

彼は公園で(今)野球をしています

② 「be 動詞+過去分詞」という形で、受動態(～される)を作る

(ex) He is loved by everybody.

彼はみんなから愛されている

③ 「have[had]+過去分詞」という形で、完了形を作る

(ex) He has gone to America.

彼はアメリカに行ってしまった

(2)分詞の形容詞的な用法【働き】。

このような(動詞的な)用法以外にも分詞についてはしっかりおさえておかななくてはいけない用法があります。それが分詞の「形容詞用法」です。

形容詞の基本的な働きは、「名詞を修飾する」と「補語になる」ことですね。

分詞の「形容詞用法」とは、この2つの働きを、分詞もするという事です。

ではさっそく具体的に、そのような形容詞的に使われる分詞の用法の特徴や、注意すべきポイントを見ていくことにしましょう。

①(直前直後から)名詞を修飾する分詞。

まずは分詞が直前直後から名詞を修飾している例を、以下にいくつかあげてみましょう。

(ex) The sleeping baby is my son.

その寝ている赤ちゃんは私の息子です

The baby sleeping in the bed is my son.

ベッドで寝ている赤ちゃんは私の息子です

the broken window

壊れた窓

the window broken by the child



その子供に壊された窓

分詞が名詞の前に置かれるのか、後ろに置かれるのかについてのルールは、以下になります。

- 1.分詞が一語で名詞を修飾する場合には、前から名詞を修飾する
- 2.後ろに語句を伴って(全体で)名詞を修飾する場合には、後ろから名詞を修飾する

會ただし、分詞が1語でも後ろから名詞を修飾する場合もある。これは以下のような決まり文句的な表現で多いと言える。

(ex) problems involved 関連する問題

the authorities concerned 関係当局

the parties concerned (関係)当事者

for the time being 当面の間、さしあたり

※「名詞+involved[concerned]」で、「関連する[した]」「問題となっている」。

ちなみに「concerned+名詞」となる場合は「心配そうな」、「involved+名詞」となる場合は「複雑な入り組んだ」という意味にそれぞれなる。

(ex) a concerned look 心配そうな表情

an involved problem 複雑な問題

②補語になる分詞。

これも例文を見た方が早いでしょう

(ex) The story seems exciting.

その話はおもしろそうだ

上の英文では「seem C:Cのように見える」の「C」に exciting という現在分詞が入っています。

(ex) I heard the song sung by her.

彼女によってその歌が歌われるのを聞いた

上の英文では「hear O C:OがCするを耳にする」の「C」に sung という過去分詞が入っています。

(3)文法問題における分詞の選び方の基本。

では実際に文法問題で、分詞が「名詞を修飾する」「補語になる」場合に、現在分詞・過去分詞どちらを選択すればいいのか、その見極め方を紹介しましょう。

①分詞が名詞を直前直後から修飾する場合

その(修飾する)名詞に対して、

「～している」

という(能動の)意味関係で修飾をする場合、**現在分詞**を用います。

Ⓢただし、「-ing+名詞」となる場合の-ing、つまり現在分詞は、基本的に「自動詞」の現在分詞形である。

逆に、その名詞に対して、

「～(させ)られた」

という(受動[受身]の)意味関係で修飾をする場合、**過去分詞**を用います。

Ⓢ他動詞の過去分詞形がこのような受け身の意味を持つ。自動詞の過去分詞が「～してしまった」という「完了」の意味を持つこともあるが、それはgone(行ってしまった)、fallen(落ちてしまった)、grown(大人になった、成長した)など、限られた動詞にのみ。

では、以下の問題で練習してみましょう。()内の語を適切な分詞形に変えてみてください。

1.The book (write) by Soseki Natsume is interesting.

[角解言説] 「本」と「書く」の意味関係は受身(本は人によって書かれるもの)。したがってwrittenが正解。

このように英語は常に「人間中心に(「受身」か「能動」かの意味関係を)考える」ことが大切。

[訳尺] 「夏目漱石によって書かれたその本はおもしろい」

2.I will take the bus (leave) here in an hour.

[角解言説] 「バスが出発する」と能動の意味関係になるのでleavingが正解。

[訳尺] 「今から1時間後にここを出発するバスに乗ります」

3.The clothes (wear) by the young have dramatically changed.

【角解言説】 「洋服」と「着る」の関係は受身(服は人によって着られるもの)。したがってwornが正解。

wear-wore-worn「(衣服等を)身につける」

【訳】 「若者が着る服は劇的に変化した」

4.A (drown) man will catch at a straw.

【角解言説】 drownは「溺れる」という意味。drownedとしてしまうと「溺れ(死んで)しまった」という意味になってしまう(それでは「わら」をつかめない)。そこでdrowningとすれば「溺れかかっている」となり、意味が通じる(drowningが正解)。

【訳】 「溺れる者はわらをもつかむ」

②分詞が「SVC」や「SVOC」の「C」になる場合

まず、「SVC」の「C」になっている場合は

- ① 「S」と「C」が能動の意味関係(SはCする)になるなら、Cには現在分詞を用いる。
- ② 「S」と「C」が受動[受身]の意味関係(SはCされる)になるなら、Cには過去分詞を用いる。

次に「SVOC」の「C」になっている場合は

- ① 「O」と「C」が能動の意味関係(OはCする)になるなら、Cには現在分詞を用いる。
- ② 「O」と「C」が受動[受身]の意味関係(OはCされる)になるなら、Cには過去分詞を用いる。

意味関係(「受動[受身]」か「能動」か)を考える際、大事なポイントは「英語は常に人間中心にその意味関係を考える」、という点です。

では、以下の問題で練習してみましょう。()内の語を適切な分詞形に変えてみてください。

1.I found the dog (lie) on the sofa.

【角解言説】 Oである「犬」とCの「横たわる」の意味関係は能動(犬が横たわっている)。したがってlyingが正解。

find O(名) C(形・分)「OはCだと思う、わかる」

lie-lay-lain-lying「横たわる」

【訳尺】「私はその犬がソファに横になっているのがわかった」

2.I saw him (knock) down by the man on the street.

【角解言説】 Oである「彼」とCの「殴り倒す」の意味関係は(knockの後ろに目的語がない。更に受身を表す前置詞のbyがある点からも)受身。したがってknockedが正解。

see O C「OがCするのを見る」

knock A down「Aを殴って倒す」

【訳尺】「私は彼が通りでその男に殴り倒されるのを見た」

3.I am sorry to have kept you (wait).

【角解言説】 waitは「自動詞」で「待たれる」というような受身はない。故に「あなたが待っている状態のままにしておいた」と考える。waitingが正解。「keep A(人) waiting: Aを待たせたままにしておく」で決まり文句として覚えてほしい。他にも似た表現として leave the water running(水を出しっぱなしにしておく)などがある。

【訳尺】「お待たせしてすみません」

4.The man stood with his arms (fold).

【角解言説】 これは with O C(OがCの状態)という構文。この場合でもOとCの意味関係で考えればよい。「彼の腕」はその持ち主である彼によって組まれるもの、つまり「腕」と「組む」には受身の意味関係が成立している。したがって答えはfolded。

fold O(手・腕等)「Oを組む」

【訳尺】「彼は腕を組んで立っていた」

レクチャー3

感情・被害を表す動詞の分詞形に注意。

感情・被害を表す動詞は、そのほとんどが「～させる」と訳します（「～する」と訳してはいけません）。具体例を見ていきましょう。

(1)感情を表す動詞とその分詞形。

- ・surprise A(人等) 「Aを驚かす」 ☞ [現在分詞] surprising「(人を)驚かすような」
[過去分詞] surprised「(人が)驚いた」
- ・disappoint A(人等) 「Aを失望させる」 ☞ [現在分詞] disappointing「(人を)失望させるような」
[過去分詞] disappointed「(人が)失望した、がっかりした」
- ・satisfy A(人等) 「Aを満足させる」 ☞ [現在分詞] satisfying「(人を)満足させるような」
[過去分詞] satisfied「(人が)満足した」
- ・interest A(人等) 「Aに興味を抱かせる」 ☞ [現在分詞] interesting「(人に)興味を抱かせるような」
[過去分詞] interested「(人が)興味がある」

[例外] marvel「驚く」 regret「後悔する」 resent「憤る」 fear「恐れる」

☞ marvel だけは自動詞。つまり marvel at A で「Aに驚く」となる。

(ex) We marveled at their skill.

我々は彼らの腕前に驚いた

(2)被害を表す動詞とその分詞形。

- ・hurt A(人等) 「Aを傷つける(事故などで)」 ☞ [現在分詞] hurting[injuring]「(人を)傷つけるような」
=injure [過去分詞] hurt[injured]「(人が)傷ついた」
- ・wound A(人等) 「Aを傷つける(戦いなどで)」 ☞ [現在分詞] wounding「(人を)傷つけるような」
[過去分詞] wounded「(人が)傷ついた」
- ・damage A(物等) 「Aを傷つける、損害を与える」 ☞ [現在分詞] damaging「(物を)傷つけるような」
[過去分詞] damaged「(物が)傷ついた」

《もう一步深く!!》

感情・被害を表す動詞は、表現を変えれば、「〇〇を与える」という意味ととらえてもいい。

☞〇〇には、その動詞が与える「感情」「被害」が入る。
たとえば、

Her beauty surprised me.

は、「彼女の美しさは私に驚きを与えた ⇒ 彼女の美しさは私を驚かせた」ということ。

The fire damaged the building.

は、「その火事はそのビルに損害を与えた」ということ。

このような感情・被害動詞の分詞形に関する問題の見極め方法は以下の通りです。

①感情・被害動詞の分詞形が、「名詞」を修飾している場合
その場合には、修飾している「名詞」が

1. 「物【無生物】」ならば現在分詞形を入れる
2. 「人(又は「表情」など)」ならば過去分詞形を入れる

と判断すると良いでしょう。具体例をあげてみましょう。

(ex) an exciting game おもしろい試合
[物]

an excited man 興奮した人
[人]

a boring lecture 退屈な講義
[物]

a bored look 退屈した表情
[表情]

a surprising news 驚くべき知らせ
[物]

a surprised man びっくりした男性
[人]

☞もちろん「人(表情など)」がその感情・被害を引き起こす原因となっている場合、感情・被害を表す動詞の現在分詞形が「人」を修飾することもある。したがって(より)正確に言えば、その「名詞」が「その感情・被害を与える原因」である場合、その「名詞」を修飾する感情・被害を表す動詞は現在分詞形になると考えるとよい。

(ex) an exciting girl ☞「女の子」が「ワクワクする」という感情を与える原因。
ワクワクするような女の子

②感情・被害動詞の分詞形が、SVCの「C」になる場合

その場合には、S(主語)が「人(又は表情)」なのか「物[無生物]」なのかで判断します。つまりそのS(主語)が

1. 「物[無生物]」ならば現在分詞形を入れる
2. 「人(又は「表情」など)」ならば過去分詞形を入れる

と判断すると良いでしょう。具体例をあげてみましょう。

(ex) I am interested in music. ボクは音楽に興味がある

[人] C

Ben was very surprised at the news. ベンはその知らせに驚いた

[人] C

The movie I saw last Monday was very interesting.

[物] C

ボクが昨日みたその映画はとても面白かった

The news was very surprising.

[物] C

その知らせは大変驚くべきものだった

④もちろん「人(表情など)」がその感情・被害を与える原因となっている場合、現在分詞形を後ろにとることもある。したがって(より)正確に言えば、「その感情・被害を与える原因」となるものが文の主語になっている場合、後に続く(Cになる)感情・被害を表す動詞は現在分詞形になると考えるとよい。

(ex) He is interesting[pleasing]. ☞「彼」が「興味深い[楽しい]」という感情を与える原因。

彼は面白い[楽しい]

③感情・被害動詞の分詞形が、SVOCの「C」になる場合

その場合には、O(目的語)が「人(又は表情)」なのか「物[無生物]」なのかで判断します。つまりそのO(目的語)が

1. 「物[無生物]」ならば現在分詞形を入れる
2. 「人(又は「表情」など)」ならば過去分詞形を入れる

と判断すると良いでしょう。具体例をあげてみましょう。

(ex) The students thought Mr. Tanaka's lecture boring.

O[物] C

生徒たちは田中先生の講義は退屈だと思った

Mr. Tanaka's lecture made the students bored.

○[人] C

田中先生の講義は、生徒たちを退屈にさせた

では、以下の問題で練習してみましょう。()内の語を適切な分詞形に変えてみてください。

1. That was a (surprise) discovery.

[解説] 修飾される名詞が「発見」。つまり「物」をあらわす名詞。
したがって surprising が正解。

[訳] 「それは驚くべき発見だった」

2. It was (disappoint) that he failed in the exam.

[解説] 「彼が試験に落ちたこと」が主語。そしてこれが「がっかり、失望」の原因(であり「物事」)。したがって disappointing が正解。

[訳] 「彼が試験に落ちたのがっかりだった」

3. I was (disappoint) at the result.

[解説] 「私」つまり「人」が主語(のSVC)。したがって disappointed が正解。

[訳] 「僕はその結果にがっかりした」

4. The TV program was so (bore) that I felt sleepy.

[解説] 「テレビ番組」つまり「物」が主語(のSVC)。したがって boring が正解。

[訳] 「そのテレビ番組はとても退屈だったので僕は眠くなってしまった」

5. The game was so (excite) that I also was (excite).

[解説] 前半の主語は「その試合」。後半の主語は「私」。したがって前半は exciting、後半は excited が正解。

[訳] 「その試合はとてもワクワクする内容だったので僕も興奮してしまった」

6.The news was (surprise) to me.

【解説】「その知らせ」つまり「物」が主語(のSVC)。したがって surprising が正解。

【訳】「その知らせは僕にとって驚きだった」

7.I found the wrestling match really (excite).

【解説】「find O C」の「O」に the wrestling match という「物事」を表す名詞が入っている点がポイント。exciting が正解になる。

【訳】「僕はそのレスリングの試合は本当におもしろいと思った」

8.I met with an accident and was (injure).

【解説】(and と was の間に)省略されているが主語は「私」。したがって injured が正解。

【訳】「僕は事故にあって怪我をした」

レクチャー4

分詞構文(分詞の副詞的用法)。

(1)分詞構文とは。

分詞構文とは、分詞一語が、接続詞と動詞の2つの役割を兼ねて、主節(あるいは動詞)を修飾するという用法です。「S+V」や動詞を修飾するのですから、これは(分詞の)副詞的な用法[働き]だということになります。

分詞(～ing)=(接)+(動)

主 節

主節とは、(従位)接続詞・関係詞・疑問詞等についていない(裸の)S+Vのこと。

(1) 分詞が「接続詞」と「動詞」の役割を兼ねる

(2) 副詞的に主節(述語動詞)を修飾。具体的には以下のような意味で修飾する

①時「～の時」

③条件「もし～なら」

⑤同時状況「～しながら」

②理由「～なので」

④譲歩「～だけれど」「～だとしても」

⑥動作の連続「～してそして…」

(2)基本的な分詞構文の作り方。

基本的な分詞構文の作り方の手順は以下の通りです。分詞一語が「接続詞」と「動詞」の(2つの)役割を兼ねるわけですから、

- ①(元の英文の)接続詞はいらなくなるのでこれを消す
- ②(元の英文の)動詞もいなくなる。動詞は現在分詞形に変える
- ③(元の英文の)主語も、(それが主節の主語と同一なら)いなくなるのでこれを消す

という手順で分詞構文が出来上がります。例をあげてみましょう。

(ex) When she saw me, she ran away.

彼女は私を見ると逃げた

- ①まず接続詞(When)を消します。

~~When~~ she saw me,

- ②次に(主節の主語と同じなので)主語(she)も消します。

~~she~~ saw me,

- ③更に動詞(saw)を現在分詞形に変えます。

saw → seeing

- ④これで分詞構文の出来上がりです。

Seeing me, she ran away.

ただし「接続詞」を省略することによる意味のあいまいさを嫌って、本来なら省略すべき接続詞をつけたままにしたような英文もときどき見受けます。

特に接続詞が「when(の時)」「while(の間)」「if(もし)」「though(～けれど)」「unless(～しない限り)」の場合に起こりやすいですね。

(ex) While staying in London, I met an old friend of mine.

[接]

上の英文では、あえて接続詞の while が消されずに残った形になっています(元々あった I was は消されてしまっています)。

(3)分詞構文における注意事項。

基本的な分詞構文の作り方は、今も説明したようにとてもカンタンなのですが、それだけなら分詞構文がこうまで英語学習者を苦しめるはずはありません。これから説明する分詞構文における注意事項が頭の中に整理できれば、分詞構文はもう完璧です。

①否定文を分詞構文にするには

以下のような、副詞節(接続詞のついている方の節)が否定文であるような英文を分詞構文にせよと言われたら、どうしたらいいでしょう。

(ex) Since I didn't know what to say, I kept silent.

接続詞の Since 主語の I を消すのはいいとして、動詞の didn't know をどうするか…。

否定文を分詞構文にするには、分詞の前に not(否定語) をつければいいのです。したがって上記の英文は、以下のような分詞構文になるわけです。

👉 Not knowing what to say, I kept silent.

何を言っているのかわからなかったので、私は黙ったままでいた

しかしこれは、なにも分詞だけのルールではありませんでした。準動詞(不定詞・分詞・動名詞)はすべて、否定する場合にはその直前に否定語(not, never など)を置くのでしたね。

(ex) He pretended not to be listening to me. 📎 不定詞の直前にnotが置かれている。

彼は私の話を聞いていないふりをした

You should be ashamed of not knowing the answer. 📎 動名詞の直前にnot

君はその答えがわからないのを恥ずかしいと思うべきだ が置かれている。

②前半と後半の節の動詞の時制が異なっている文を分詞構文にするには

以下のように、副詞節と主節で動詞の時制が異なる英文を分詞構文にせよと言われたら、どうしたらいいでしょう。

(ex) As he caught cold, he is absent from school today.

接続詞の As、主語の he を消すのはいいとして、動詞の caught の部分をどうするか…。単なる Catching では主節との時制のズレが表せません。

前半と後半(つまり副詞節と主節)で動詞の時制が異なっている(副詞節の方が、主節よりも時制が古い)場合、動詞を～ing 形にするだけではダメ。完了形に分詞、つまり「having+p.p.～」にしなくてははいけません。

したがって上記の英文は、以下のような分詞構文になるわけです。

☞ Having caught cold, he is absent from school today.

風邪をひいたので、彼は今日学校を休んでいる

「having+p.p.～」は、主節の動詞より時制が1つ古い(昔である)ことを表します。でも、これも分詞だけでなく、不定詞、動名詞すべて同じでしたね。つまり完了形の準動詞(to have+p.p.~/ having+p.p.～)は、全て主節より時制が1つ古いことを表すのです。

③前半と後半で主語が異なっている英文を分詞構文にするには

以下のような、副詞節の主語と主節の主語が異なるような英文を分詞構文にせよと言われたら、どうしたらいいでしょう。

(ex) Because it rained, we put off [延期する] going on a picnic.

接続詞の Because を消す、動詞の rained を raining にするのはいいとして、it をどうするか。これまでは前後半共に主語が同一だったので消してきましたが…。

前半と後半(つまり副詞節と主節)の主語が異っている英文を分詞構文にする場合、これまでとは違い、副詞節の主語は消さずにそのまま残しておかなくてははいけません。

したがって上記の英文は(it は消さずに残して)、以下のような分詞構文になるわけです。

☞ It raining, we put off going on a picnic.

雨が降ったので私達はピクニックを延期した

もう一例見てみましょう

(ex) As John returned safe, everybody was relieved.

☞ John returning safe, everybody was relieved.

ジョンが無事戻ったので、みんなはほっとした

このような、分詞の前についた名詞というのは、元々の英文の主語なわけで、後ろの分詞とは「主語と述語の関係」になります。そしてこの分詞の前についた名詞のことを、分詞の「意味上の主語」と言います。

名詞 + 分詞(doing)
主語 述語

結局、主節の主語と意味上の主語との関係は以下のようになります。

- ① 「主節の主語 = 意味上の主語」 → 意味上の主語は明示しなくていい
- ② 「主節の主語 ≠ 意味上の主語」 → 意味上の主語は明示しなくてはいけない

そしてこのルールにしても、準動詞(不定詞・分詞・動名詞)全てに当てはまるものですね。本当に準動詞というのは、それに関するルールは一つ[同じ]なのです。

④ 「There is[are] 構文」を分詞構文にするには

以下のような、副詞節が there is[are]構文であるような英文を分詞構文にせよと言われたら、どうしたらいいでしょう。

(ex) Since there were no seats on the train, we stood all the way.

接続詞の Since を消すのはいいとして、主語は…。

there is[are] 構文を分詞構文にする場合、there を主語に見立てるのです。したがって前半と後半の主語が異なっているということになり、there は消さずに残します。とすると上記の英文は、以下のような分詞構文になるわけです。

☞ There being no seats on the train, we stood all the way.

列車には席がなかったので、私達はずっと立っていた

there が意味上の主語の位置に置かれるというのは、何も分詞構文だけのことでありません。これも準動詞全てにあてはまるルールなのです。

つまり、

There is[are] (S) (名) ~ 「Sがいる(ある)」

という構文の is[are] が準動詞になる場合、**全て there は、その意味上の主語の位置に置かれるのです。**

There is[are] ⑤(名)～ → 1. for there to be (名)～
[不定詞化] 2. $\frac{S+V \text{ there to be (名)～}}{O \quad C}$

⑤Vは expect, want, would like 等、特定の動詞。

→ there being (名)～

[動名詞化]

→ there being (名)～

[分詞化]

(ex) It is natural for **there** to be some problem about it.

それについて何らかの問題点があるのは当然だ

I didn't say anything about it because of **there** being his wife.

彼の奥さんがいたので私はそのことについては何も言わなかった

There being no bus service, I had to take a taxi.

バスがなかったので私達はタクシーに乗らなければならなかった

こうして見てみると、準動詞は本当にそのルールがそっくりなのわかります。不定詞・分詞・動名詞については、バラバラに覚えるのではなく、3つきちんとまとめて、整理していっしょに覚えるのが効率的だということがあらためて実感できますね。

⑤動詞が be 動詞であるような英文を分詞構文にするには

以下のように、(副詞節の)動詞が be 動詞であるような英文を分詞構文にせよと言われたら、どうしたらいいでしょう。

(ex) As she was left alone, she began to weep.

接続詞の As、主語の she を消すのはいいとして、動詞の was をどうするか…。

動詞が be 動詞の場合、分詞構文にすれば being(主節と時制のズレがあれば having been)になるのですが、この **being(having been)**は普通省略することが多いのです。

したがって上記の英文は、以下のような分詞構文になります。

☞ [Being] Left alone, she began to weep.
一人にされたので、彼女は泣き出した

もう一例見てみましょう。

(ex) As I was persuaded by my friends, I gave up killing myself.

☞ [Being] Persuaded by my friends, I gave up killing myself.
友人に説得されたので、私は自殺するのをあきらめた

このように過去分詞で始まる分詞構文は、すべて元々受動態だったと考えていいでしょう。

ではもう1つ、この英文を同じように分詞構文にするとしたらどうなるでしょう。

(ex) If you are able to operate a computer, you will be hired.

この英文を分詞構文にした場合、以下のような英文になりますね。

☞ [Being] Able to operate a computer, you will be hired.
[形容詞]

コンピューターを操作することができれば、君は雇ってもらえるだろう

この英文のように Being が省略された結果として、形容詞で始まる分詞構文もあり得るということを覚えておいてください。

それから being に関してあと1つだけ補足しておきます。

there is 構文を分詞構文にする場合、There being～という形になると言いましたが、この場合の being は省略しません。なぜかという、先程の英文を例にあげれば、being を省略して、

There no seats on the train, we stood all the way.

などとしてしまうと、読者が文頭の There を、「そこに」という there と混同してしまうことになりかねないからです。

⑥分詞構文の分詞句は後に置かれることもある

分詞構文を作る分詞句は、必ずしも文頭に置かれるとは限りません。文の中盤や、後半に置かれることもあります。以下に例をあげてみましょう。

(ex) An old man came up to me, asking me to dance with him.

=and he asked me to dance with him

The birds, (being) alarmed by the shot, flew away.

=because they were alarmed by the shot

⑦分詞構文の訳し方

まず整理すると、分詞構文の分詞句は、以下のように文章の前半・中盤・後半の3ヶ所に置かれうるということです。

1. Doing~
p.p.~
(形)~ } , (S)+(V)...

2. ~, { doing~
p.p.~
(形)~ } , ~

3. (S)+(V)..., { doing~
p.p.~
(形)~ }

このうち、分詞句が文頭、文中盤（1. 2. のタイプ）の場合の訳し方は、以下になります。

①[時] 「~のとき(間)」 「~(しようとする)と」 「~につれて」 「~した後」 等

②[理由] 「~なので」 「~により」 「~のおかげで」

③[条件] 「もし~なら」

④[譲歩] 「~だけれど」 「たとえ~としても」

①~④の順番通り覚えよう。なぜなら「時」で訳せる場合が最も多い。

次が「理由」、その次が「条件」。「譲歩」の可能性は最も低い。

次に、分詞句が文章後半にあった場合（3. のタイプ）の訳し方は、以下になります。

①[連続] 「そして~(する)」

②[同時] 「~しながら」

(ex) The man took a step forward, singing a song for her.

その男性は一步前に進み出て、そして彼女のために歌を一曲歌った

The boys sat on the grass, looking at the setting sun.

少年たちは沈んでいく夕日を眺めながら、草の上に座っていた

もちろん文章後半でも「時」「理由」「条件」「譲歩」のいずれかで訳した方がいい分詞句もあります。また文章前半や中盤の分詞句を「そして～」「～しながら」と訳した方がいいこともあるので、文脈によって臨機応変な対応は必要です。

(4) with O C で「OがCの状態」。

これも分詞構文の一種(独立分詞構文と呼ばれる)なのですが、「with O C 構文」として覚えてしまった方がカンタンです。「OがCの状態」が訳し方の基本です。この「with O C 構文」の特徴を以下にまとめてみましょう。

- ①Oには名詞(代名詞なら目的格)が入る。
- ②Cには「形容詞」「分詞」「前置詞+名詞」「副詞」等が入る。
- ③OとCには、意味上「(OはCする[になる/である])という主語と述語の関係」が成立している。だから英文中で「with+名詞」の直後に「形容詞」「分詞」「前置詞+名詞」「副詞」があり、かつそれらと直前の「名詞」との間に「主語と述語の関係」を読み取ることができたらこの with O C 構文なのではないか、と頭を働かせること。

with + 名詞 +	{ 「形容詞」「分詞」 「前置詞+名詞」 「副詞」	「OがCの状態」
[主語]	[述語]	

実際の例文で今度は見てみましょう。特にCのバリエーションに注目して下さい。

(ex) with the ribbon flying in the wind

[現在分詞]

風にリボンをなびかせながら

with one's mouth full

[形容詞]

口に食物を頬張った状態で

with one's hands in one's pockets

[前置詞+名詞]

手をポケットに入れた状態で

with the tape recorder on

[副詞]

テープレコーダーがオンになっている状態で

⇒ テープレコーダーで録音しながら

それから、「with O C 構文」の訳の基本は「OがCの状態」ですが、実際の英文中では、それでは上手く訳せないこともあります。その場合には、以下の6種類のどれかから訳を選択すると良いでしょう。

- ①「～のとき」 ②「～なので」 ③「もし～なら」 ④「～けれど」
- ⑤「そして～」 ⑥「～しながら」

《 分詞構文の訳し方のまとめ 》

①分詞句が文頭、文中盤にある場合には「時」「理由」「条件」「譲歩」のどれかで訳す。

②分詞句が文章後半にあった場合には「そして～(する)」「～しながら」のどちらかで訳す。

會もちろん文章後半でも「時」「理由」「条件」「譲歩」のいずれかで訳した方がいい分詞句もある。また文章前半や中盤の分詞句を「そして～」「～しながら」と訳した方がいいこともあるので文脈によって臨機応変な対応は必要。

③過去分詞や形容詞で始まるような分詞構文には注意せよ。訳し方のルールは普通の分詞構文と同じ。

④「with O C構文」かどうかの見極めは、with の直後の語句に「主語と述語の関係」が成立しているかどうか。成立していれば with O C構文。そのうまい和訳の仕方は、「時」「理由」「条件」「譲歩」「そして～(する)」「～しながら」の6種類のうちから文脈に則して適当なものを選ぶ。

間違えやすい分詞構文(特に過去分詞で始まる分詞構文など)。

以下の空欄中の see を seeing、seen いずれかに変えよと言われたら、さてどちらが正解になるのでしょうか。

(See) from a distance, it looks like a human face.

遠くから見ると、それは人間の顔のように見える

この手の問題の見極めのポイントは、主節の主語との意味関係(「能動」か「受身」か?)について考えてみることです。

つまり上記の問題、主節の主語の「it(それ)」と「see(見る)」との意味関係は明らかに「受身」(「物」である「it(それ)」は、「人」によって見られる側)です。したがって正解は過去分詞の Seen。

なお繰り返しになりますが、意味関係を考える際「英語は常に人間中心に(その意味関係を考える)」という点を忘れないでください。

では、以下の問題で練習してみましょう。()内の語を適切な分詞形に変えてみてください。

1.(See) it from a distance, you may take it for a human.

[解説]後半の主節の主語の「you(あなた)」と「see(見る)」の関係に着目する。

人間である「あなた」が「見る」わけで、その意味関係は「能動」。

したがって正解は現在分詞の Seeing。

[訳]「遠くから見ると、君はそれを人間と間違えるかも知れない」

2.(Use) economically, this will last for a year.

[解説]後半の主節の主語の「this(これ)」と「use(使う)」の意味関係は「受身」

(「物」である「これ」は「人」によって使われる側)。したがって正解は過去分詞の Used。

[訳]「経済的に使えば、これは1年は持つだろう」

3.(Compare) with the old one, this machine is so inexpensive.

[解説]後半の主節の主語の「this machine(この機械)」と「compare(比較する)」の意味関係は「受身」。したがって正解は過去分詞の Compared。

[訳]「古いのと比べると、この機械はとても安価だ」

4.All things (consider), we were very lucky.

[解説]このように(空欄の)前に名詞がある、つまり意味上の主語がある場合には、その名詞(意味上の主語)との関係について考えてみる。つまり「all things(全てのこと)」と「consider(考慮に入れる)」の意味関係だ。これは受身(「物事」は「人」によって考慮される側)。したがって正解は過去分詞の considered。

[訳]「全てを考慮に入れれば、我々は幸運だった」

レクチャー6

慣用的な分詞構文。

以下のものは、一種の決まり文句として覚えてしまいましょう。

(1) Strictly[Generally/Frankly/Roughly/Historically] speaking,

「厳密に[一般的に/率直に/大雑把に/歴史的に]言って」

(ex) Frankly speaking, it is difficult to deny the fact.

率直に言って、その事実は否定しがたい

(2) Judging from A, 「Aから判断すると」

(ex) Judging from the look of the sky, we'll have a shower this evening.

空模様から判断すると、夕立が降りそうだ

(3) Granting[Granted/Admitting] (that) S+V~, 「～だとしても」 [譲歩]

(ex) Granting (that) Mr. Lee is not a bad person, I can't trust him.

リー氏が悪い人間でないとしても、私は彼を信用できない

(4) Assuming (that) S+V~, 「仮に～ならば」

(ex) Assuming it rains tomorrow, what will we do?

明日雨が降るとしたら、どうしましょう

(5) Considering (that) S+V~, 「～を考慮に入れると」

(ex) Considering (that) he has experience, I think he could win the race.

彼の経験を考慮すると、彼はその試合に勝てるだろうと思います

(6) Talking[Speaking] of A, 「Aといえば」

(ex) Talking of paintings, which painter do you like best?

絵画といえば、どの画家が一番好きですか

(7) Taking A into consideration[account], 「Aを考慮に入れると」

=Considering A

=A considered

(ex) Taking his age into consideration, my son did it quite well.

=Considering his age,

=His age considered,

彼の年齢を考えれば、うちの息子はとてもうまくやった

(8) Weather permitting, 「天気が許せば」

(ex) Weather permitting, we'll start tomorrow morning.

天気が許せば、我々は明日の朝出発する

(9) Provided[Providing] (that) S+V~ 「もし～ならば」

☞ifと同じ意味だが、仮定法には用いない。

(ex) Provided (that) the weather is clear, we'll go on a hike.

天気さえよければ、ハイキングに行きます

(10) Supposing (that) S+V~ 「もし～ならば」「たとえ～としても」

☞ifと同じ意味で、仮定法でも用いる。Suppose (that) S+V~ でも言い換えられる。

(ex) Supposing (that) Jim were here, what would you say to him?

もしジムがここにいたら、君は彼に何と言いますか

Where can they hide, even supposing they can escape from the police?

たとえ警察から逃げられても、彼らがどこに隠れることができようか

(11) Seeing (that) S+V~

「~という事実から見ると」「~なので」

(ex) Seeing (that) you've come, we'll settle it now.

君が来たのだから、今決めてしまおう

(12) Such being the case,

「こういう事情なので」

(ex) Such being the case, I can't go there with you.

こういう事情なのであなたと一緒にそこには行けません

(13) Night coming on,

「夜になったので」

(ex) Night coming on, we went back home.

夜になったので、私たちは家に帰った

(14) Given { (that) S+V~
A(名詞)

①「~だと仮定すると」

②「~を考慮すれば」

③「Aがあれば」

(ex) Given (that) she is still young, she did well.

彼女がまだ若いという点を考慮に入れば、彼女はよくやった

Given his inexperience, this failure need not surprise us.

彼には経験がないことを考えれば、この失敗は驚くまでもない

Given health, one can do anything.

健康があれば何でもできる

Given (that) this is true, what should we do?

これが本当だと(仮定)すれば、我々はどうすべきか

分詞形容詞について。

レクチャー1で、分詞とは『「動詞」と「形容詞」の性質を”分かち”持つ”詞(ことば)”』という意味だと言いましたが、分詞の中には、動詞的性格を失い100%形容詞として働くようになったものもあります(辞書にも形容詞として紹介されている)。簡単な例を挙げると tired(疲れた)や、charming(魅力的な)、thrilling(スリルに飛んだ)、handmade(手作りの)、heartwarming(心温まる)などがそうです。

④「レクチャー3」で紹介した「感情・被害を表す動詞の分詞形」も実はこの分詞形容詞の仲間。

この分詞形容詞の中には、日本人には意外に思える意味になるものもあります。特に注意すべきものについては、「頻出分詞形容詞一覧」として巻末に載せておきましたので、見てみるといいでしょう。

《補足：準動詞の働きのまとめ》

	名詞用法(S・O・Cになる)	形容詞用法(名詞を修飾する・補語になる)	副詞用法(名詞以外を修飾)
不定詞 (to do/ do) ④do[原形]は、基本的にC(補語)になるのみ。	○ ④「すること」と訳す。	○ ④不定詞の形容詞用法は名詞を(後ろから)修飾する働きのみ。「するはための(ような)」「すべき」「という」と訳す。	○ ④「目的」「結果」「条件」「感情の原因」「判断の根拠」「形容詞の補足」など。
動名詞 (doing)	○ ④「すること」と訳す。 不定詞と違って「前置詞の目的語」にもなれる。	×	×
分詞 (doing / p.p.)	×	○ ④分詞は名詞を修飾する以外に補語にもなれる。	○ ④分詞構文がこの用法にあたる。

(注)不定詞の名詞用法と、動名詞の名詞用法の違いは、動名詞と違って、不定詞は前置詞の後ろには置けない、という点だった。

	用法	意味上の主語	否定形	受け身形	完了形
不定詞	名詞 形容詞 副詞	for A(目的格) to do[原形] S+V A(目的格) to do[原形] ⓈただしVはexpectなど。	not to do	to be+p.p. p.p.=過去分詞	to have+p.p.
動名詞	名詞	A(所有格or目的格) doing ⓈAに名詞がそのまま入ることもある。	not doing	being+p.p.	having+p.p.
分詞	形容詞 副詞	A(主格の名詞) doing	not doing	being+p.p.	having+p.p.

(注1)用法に関して…不定詞だけが名詞、形容詞、副詞のすべての用法がある。動名詞は名詞用法のみ。分詞の「副詞用法」とは分詞構文のこと。

(注2)意味上の主語に関して…上の表のAとそれぞれの準動詞(不定詞・動名詞・分詞)の間には、主語と述語(「Aが～する」)の関係が成立している。

Ⓢまた、意味上の主語と、文の主語が同じである場合には意味上の主語は書かなくていい(省略できる)というルールも、不定詞、分詞、動名詞すべてに共通している。

(注3)否定に関して…Ⓢのように準動詞の否定は、すべて準動詞の前に否定語(not など)をつける。

(注4)完了形に関して…完了形の準動詞は、述語動詞より時制が1つ昔であることを表す。ただ、希望・期待・意図を表す動詞の過去時制の後につづく完了不定詞は、その希望・期待・意図などが「実現できなかった」という意味を表す。

①She hoped to have become a nurse.

=She hoped to become a nurse but she couldn't.

②She hoped to become a nurse.

①は「彼女は看護婦になりたかった(が実際になれなかった)」という意味を持っている。

②では、彼女が本当に看護婦になったかどうかは不明。

(注5) There is[are] 構文を分詞構文にする場合、there を(意味上の)主語に見立てて、分詞の前に置くわけだが、これも準動詞すべてに共通するルール。つまり、There is[are] 構文を不定詞で書き換える場合も、there は不定詞の意味上の主語に見立てられ、

for there to be+名詞

という形になる。動名詞で書き換える場合でも

there being+名詞

と、there は動名詞の直前(つまり意味上の主語を置く位置)に置かれる。